



残暑お見舞い 申し上げます！



とうとう夏休みが終了しました。長い夏も短かい夏も...よくわかりませんが、それでもひたひたにそれぞれの「夏」があったことではう。
 私にとってこの夏は、これと言って何をしたわけでもなく...ただ例年以上に「いのち」について考えることの多い夏になりました。このことについては、今回の「生きる」の中で触れておいて、ぜひ読んでみてください。前期後半をむねえろにあたって、全校集会の中でも「いのち」について話しています。
 さて!!久しぶりの学校ですね。まだまだしばらくは暑日が続きます。家庭での生活リズムから早く学校生活のリズムに戻ってほしい。
 ふうふうで「ひめゆり」残暑お見舞い申し上げます!!

夏休みになると、必ずこの日がやってきます。8月15日、終戦の日...80年前の出来事です。今年もこの日は我が家にいました。朝から蝉の鳴き声が響いていました。まぶしい日差しが照りつけていました。80年前を生きていた人たちは、このまぶしい太陽や蝉の鳴き声をどのような心情で見て、そして聞いていたのでしょうか...

戦後80年の節目ということもあったので、この夏休みは戦争にまつわる映画を観に行くことにしました。「木の上の軍隊」と「雪風 YUKIKAZE」です。これまでも多くの戦争映画を観てきましたが、また違う側面から戦争というものについて深く考えさせられた作品でした。改めて戦争の悲惨さや命の尊さを感じることができました。さらに、東京で上映されている舞台「Mother 特攻の母 鳥濱トメ物語」が、BSよしもとで放送されることを知り、我が家でじっくりと観ることができました。

私が初任の時、ある先生との出会いから「演劇」に魅了されていきました。それから何本か脚本を手がけたりもして、子どもたちと作品作づくりに励むことが楽しくてたまらなくなりました。「命どう宝」という沖縄戦の劇を手がけた後は、「はだしのゲン」や「ホタル帰る」、「ひめゆり」といった戦争を題材とした劇をつくりました。「永遠のゼロ(零)」が放映された年に発表した「ホタル帰る」は、「Mother」の鳥濱トメさんのお話です。「ホタル帰る」の舞台は鹿児島県の知覧というところ。知覧は戦時中特攻隊の方々が戦闘機に乗って沖縄の海に飛び立った場所です。特攻兵の方々と知覧を舞台にした「ホタル帰る」はいつか皆さんにも見てもらいたい作品です。

12年ほど前になりますが、「ホタル帰る」の劇で中心的な役を演じた女の子がいました。その子は高校卒業後東京に上京し、舞台役者を目指していました。7年ほど前に、オーディションに合格したから見に来てほしい!と連絡が入りました。その作品がミュージカル「ひめゆり」でした。彼女は私に、この舞台を通して「戦争の歴史」を多くの人に見てほしいという願いがあると話してくれました。舞台が始まる前までは教え子の登場にワクワク感でいっぱいでしたが、いざ舞台が始まると、終始心が引き裂かれそうな苦しさで、自分の心臓がドキドキと震えるのが分かりました。感動...とはまた何か違う感情があった気がします。涙が止まりませんでした。

戦争が終わって80年目の夏でした。毎年夏休みは多くのテレビで戦争のことを取り上げた番組やドラマが放映されます。今年の高校野球の中継でも、やはり8月15日は黙とうが捧げられました。毎年夏になると、私の全く知らない時代のことを、決まって考えさせられます。

昨年10月に母を病気で亡くしました。享年79歳でした。今年の夏、8月15日は母の初盆の供養を行いました。昭和20年8月22日、この日に私の母は生まれています。戦争が終わったたった1週間後です。もし生きていたら母も80歳でした。そんな母ですら戦争を知らない世代です。生活環境はこの80年で劇的に変わりました。おそらく私の母の幼少期は、本当に日本が一番厳しい時代であったことが想像できます。では今はどうでしょう...もはや声に出して説明することはありません。ただ、「木の上の軍隊」や「雪風 YUKIKAZE」、「Mother」を観ていて、胸が苦しくなりました。

教職生活をスタートさせてから34年の月日が流れました。つい先日、私が初めて教師になったときに担任した生徒から、学校に電話がありました。近いうちに会いに来たいとのことで、実に30年以上ぶりの再会になりそうです。当時私が23歳の時の13歳の中学生ですから、今は47歳、いい歳になっていることでしょう(そういう私も随分歳を取りました)。しかし、どの時代の子どもたちも、私が教えていた当時は13歳から15歳の少女たちでした。卒業して高校生になり、「せんせー」と言いながら無邪気に遊びにやってくる子どもたちが、それでも17歳とかそのあたりです。そんな若い女の子たちが、戦時中に陸軍病院へ動員され、負傷兵の看護を行い、解散命令の後に多くの犠牲者を出しました。知覧を含む九州各地の航空基地から、沖縄の海に散華していった少年飛行兵たちも、あまり変わらぬ世代の若者たちでした。「ひめゆり学徒隊」も、「特攻兵」も、その主役はまさに私が会ってきた子どもたちと同じ世代の少女少女たちです。

私自身、戦争のことは何も知りません。あのとき日本で何が起きていたのか?歴史の勉強で点として多少の知識はあっても、それ以上のことを学ぶには、何かとの出会いがなければ巡り会うこともできません。私にとって「命どう宝」や「ひめゆり」、「永遠のゼロ(零)」や「ホタル帰る」との出会い、本当に大きな財産になっています。まだまだ元気なうちに、戦跡を巡る旅もしていきたいものです。戦争を知る語り部の方々も高齢化しています。文字だけで学ぶのではなく、現地へ立ち、現地を自分の目で見て、現地の方の声を聞くことこそが最大の学びなのではないかと思う今日この頃です。